

2 題については、発表者への質問だけでなく、参加者間での意見交換など示説形式であることで、会場が一体となった有意義な討論をさせていただくことができました。私自身、意見を現場に持ち

帰り、今後の実践の参考にさせていただきたいと思います。最後に、今回、座長の機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

シンポジウム

「インフォームドコンセントにおける看護師の役割」の コーディネーターをつとめて

河 村 一 海（金沢大学医薬保健研究域保健学系）
栗 原 早 苗（金沢大学附属病院）

人々は、自己の健康状態や治療について知る権利、十分な情報を得た上で医療や看護を選択する権利を有している。この自己決定の権利を尊重するためには、インフォームドコンセントは欠かせないものである。また、インフォームドコンセントは法的にも基本的な行為であり、日常的に行われている。今回は、患者が自己決定できるようなインフォームドコンセントを行うために、看護師の役割、また、医療チームとして患者をどのように支援していけるのか、チーム間でどのような連携を図れるかなどについて意見交換することを目的とした。

竹内外美栄さん（ひまわり会）は、患者の立場から、ご自身の体験の中で3回の重要なポイントでの医師や看護師の対応を振り返り、医療者と患者の間で思いやタイミングがずれていたことを話された。また、インフォームドコンセントや日常の関わりにおいて、患者を支える看護とはどうあるべきか問題提起していただいた。

救急看護認定看護師の立場から大河和美さん（公立能登総合病院）は、救命が最優先される救急場面では患者を置き去りにして家族と医療者で治療方針を決定してしまいがちであるが、患者を中心としたインフォームドコンセントが大変重要であると述べられた。

糖尿病看護認定看護師の立場から東康子さん（芳珠記念病院）は、糖尿病患者の指導・教育の場面において、医療者側からの押し付けにならずに、患者が自己決定できるように、患者の思いを

くみ取りながら指導・教育していくことの重要性を語られた。

認定看護管理者の立場から中西容子さん（金沢市立病院）は、メディエーションの活動を通して患者・家族がコンセントにたどりつくまでの過程を紹介し、小さな認識のずれがコンフリクトにつながると述べられた。

医師の立場から竹川茂先生（金沢医療センター）は、がん医療におけるインフォームドコンセントの場面で看護師に望む役割について述べられた。アドボケイトとしての役割はもちろんのこと、看護師だからこそできる情緒的サポート、情報提供者の役割に加えて、医師をサポートする役割があると述べられた。とりわけ、患者への情緒的サポートの重要性を強調された。

患者が自己決定できるようなインフォームドコンセントにおいて、医療チームでサポートするようコーディネーターの役割を担うこと、患者の気持ちに寄り添い情緒的サポートすることの重要性などが看護師の役割ではないかと、以上5名のシンポジストが共通して述べられていた。

全体討議では、「傷のことをどう思ったか」という看護師の問いに患者としてどう感じたか、患者と家族間のコンフリクトをどのように調整するか、インフォームドコンセントの準備としてチームとしてどうすべきかなどの質問があった。時間の余裕がなく討議時間が短くなってしまったが、参加いただいた方々、ご質問をいただいた方々に、あらためてお礼を申し上げたい。